

日本語教員養成課程における 教案作成指導・教材開発の授業での ICT 利用の試み

谷 誠司, 坂本 勝信

Use of ICT in Lesson Planning & Materials Development Class
in the Japanese Language Teacher Training Course

Seiji TANI, Masanobu SAKAMOTO

2019 年 11 月 8 日受理

抄 録

本報告は「教案作成指導・教材開発」の授業において履修生の増加に対応するために模擬授業（導入部分）ビデオの作成や Teams といった ICT を活用した試みを報告するものである。また、授業改善のために学生の相互評価が高かった導入ビデオと低かった導入ビデオを 2 本ずつ選び、授業担当者ではない日本語教育を専門とする別の教員がそれらのビデオを見て、独自に行った再評価とフィードバックについても報告する。

キーワード：「教案作成指導・教材開発」、模擬授業（導入部分）、ビデオの作成、Teams、学生間相互評価、日本語教育専門家による評価

1. 実践の背景

平成 28 年 7 月に留学生を受け入れることができる日本語教育機関の基準を定めた「日本語教育機関の告示基準」が法務省から公示され、平成 29 年 8 月から施行されている。この新しい「日本語教育機関の告示基準」の解釈を示す「日本語教育機関の告示基準解釈指針」では日本語教育に関する教育課程では教育実習 1 単位以上が必修化することが求められた。

常葉大学外国語学部では平成 24 年度より日本語教員養成課程を設置し、英米語学科とグローバルコミュニケーション学科の学生が履修している。当初の教育課程では教育実習科目は必修ではなかったが、前述の新しい「日本語教育機関の告示基準」により、平成 29 年度入学生より教育実習科目（「日本語教育実習」）が必修化された。

¹ 必修科目であった「日本文化論 A」と「日本文化論 B」が選択科目になり、選択科目であった「教案作成指導・教材開発」と「コースデザイン・評価」が必修科目になった。

それに伴い、教育実習に備えるために課程内の必修科目の見直しを行い、「教案作成指導・教材開発」が必修化された¹。

必修化される前までの「教案作成指導・教材開発」は選択科目であったため、履修生は多くても 30 名程度であったが、平成 31 年度では必修化されたことにより履修生は 70 名になった。そのため、当初考えていた班単位でのクラス内発表を中心とした授業運営を変更せざるをえなくなった。

「教案作成指導・教材開発」は表 1 にあるような到達目標と授業計画／内容でここ数年行われてきた。到達目標は日本語教育における初級 1 回分の授業を行うために必要な教案と教材を作ることができるようになることである。そのために外国語授業の基本的な流れ（「導入（presentation）」→「練習（practice）」→「産出（production）」）のそれぞれの段階に関する必要な知識を講義で伝え、その後、課題を提示し学生 3・4 名程度の班ごとに準備をして教室で発表²をしていた。このパターン（講義→発表）を「導入（presentation）」「練習（practice）」「産出（production）」ごとに合わせて 3 回し、最後に「導入（presentation）」「練習（practice）」「産出（production）」のすべて含んだ 15 分の模擬授業をしてきた。

表 1：「教案作成指導・教材開発」の主な到達目標と授業計画／内容

主な到達目標

- 1) 初級 1 回分の授業をするために必要な教案作成や教材作成に関する知識を身に着ける。
- 2) 学んだ知識を使って、実際に初級 1 回分の授業のための教案と教材が作成できるようになる。

授業計画／内容

1. 授業紹介、単語の導入 (4/12)
2. 導入の方法（講義）(4/19)
3. 導入の方法（課題）(4/26)
4. 導入の方法（課題の発表）(5/10)
5. 練習の方法（講義）(5/17)
6. 練習の方法（課題）(5/24)
7. 練習の方法（課題の発表）(5/31)
8. 産出の方法（講義）(6/7)
9. 産出の方法（課題）(6/14)
10. 産出の方法（課題の発表）(6/21)
11. ゲストスピーカーによる特別講義（日本語学校で実際に教えている先生から現場での初級の教え方についてお話していただく。(6/28)
12. 教案作成（講義&課題）(7/5)
13. 模擬授業 1（教案作成&教材作成を含む）、feedback (7/12)
14. 模擬授業 2（教案作成&教材作成を含む）、feedback (7/19)
15. 模擬授業 3（教案作成&教材作成を含む）、feedback (7/26)

² ここでいう「発表」とは導入であれば導入を実際に教室ですることであり、こういった導入をするのかを教室で説明することではない。

しかし、平成 31 年度は履修者が増えたため、当初考えていた授業計画を変更せざるをえなくなった。「導入 (presentation)」「練習 (practice)」「産出 (production)」のそれぞれを学生 3・4 名程度の班ごとに準備をして教室で発表することは時間的に無理である。(70 名の履修者を 4 名ごとに班にしても 18 班となり、10 分の発表をすると、2 回以上の授業回数が必要になる。)

そこで「導入 (presentation)」「練習 (practice)」「産出 (production)」のすべてを班ごとに教室で発表することをあきらめ、「導入 (presentation)」と最後の模擬授業だけにした。また、「導入 (presentation)」については実際に教室内でやるのではなく、導入のビデオを作成し、Microsoft office365 内にある Teams を利用して、そのビデオを他の班の学生に見てもらうことにした。この方法を試みた理由は、第 1 に時間短縮、第 2 に学生間の相互フィードバックの強化、第 3 に ICT を活用した授業の経験のためである。

本報告は「教案作成指導・教材開発」の授業において履修生の増加に対応するために模擬授業（導入部分）ビデオの作成や Teams といった ICT を活用した試みを報告するものである。また、授業改善のために学生の相互評価が高かった導入ビデオと低かった導入ビデオを 2 本ずつ選び、授業担当者ではない日本語教育を専門とする別の教員（以下、「別の教員」とする）がそれらのビデオを見て、独自に再評価とフィードバックをした。

2. 実践の内容

2.1. 授業進行／内容

実際の授業は表 2 のように進行した。導入に関する回が 3 回～8 回までと多くなったのは、第 4 回で導入の教案作成の班活動をし、第 5 回から 8 回までに別の班を編成して班活動をしたためである。本報告では第 5 回から 8 回までの活動を主に報告する。

表 2：実施の授業進行／内容

1. 授業説明・単語の導入
2. 単語の導入
3. 導入の方法（講義）
4. 導入の方法（課題：導入の教案のみ作成）
5. 導入の方法（第 4 回で作成した教案への feedback、導入ビデオ作成の準備①）
6. 導入の方法（導入ビデオ作成の準備②）
7. 導入ビデオの視聴と相互評価
8. 導入ビデオの相互評価結果とコメントの返却、班ごとのディスカッション→事後レポートの作成&提出
9. 練習の方法（講義 & 課題）
10. 産出の方法（講義 & 課題）
11. 模擬授業準備

12. 模擬授業 1 (4 班発表)
13. 模擬授業 2 (4 班発表)
14. 模擬授業 3 (4 班発表)
15. 模擬授業 4 (3 班発表)

2.2. 「導入」ビデオの作成

「導入」ビデオの作成の前段階である第 3 回で、履修生は「導入」の目的や方法についての講義を受けており、その後、「～が好きです、～が嫌いです」を学習文型として、「自分の好き嫌いについて話すことができる」「ほかの人に好き嫌いについて質問することができる」を到達目標とする授業の導入部分だけの教案を班ごとに作成した。作成した教案は授業担当教員がコメントを書いて各班に返却し、班ごとにフィードバックを行った。

「導入」ビデオの作成にあたって、履修者 70 名を 1 班 4 名で 18 班編成し、更に 1 班～9 班と 10 班～18 班の 2 つに分けた。1 班～9 班は「これ・それ・あれ・どれ³ A 課題」を担当し、10 班～18 班は「～たいです⁴ (B 課題)」を担当することとした。「導入」ビデオの作成には第 5 回と第 6 回を充てたが、どの班も授業時間内では完成せず、授業時間外で作成作業をした。

導入ビデオ作成においては、以下のような指定や指示をした。

- ①ビデオの構成：以下の 3 つを必ず入れる。
 - a) 班番号、班員の学生番号と名前、b) 導入、c) 板書(説明)
- ②動画の時間：5 分程度
- ③学習文法について事前に十分調べる⁵。

³- 国立国語研究所のサイトにある「ことば研究室」では以下のように説明している。「『これ』『それ』『あれ』などの指示詞は、基本的には、指示対象までの距離に応じて使い分けられます。以下では、さらに詳しい使い分けについて見ていきますが、その前に用語をいくつか導入しましょう。まず、近距離を指す『これ』を《近称》、中距離を指す『それ』を《中称》、遠距離を指す『あれ』を《遠称》と呼ぶことにします。そして、会話の現場にある対象を指すことを《現場指示》、会話の現場にない対象を指すことを《非現場指示》と呼ぶことにします。」さらに詳しい説明は次の URL にある。<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-62/>

⁴ 東京外国語大学言語モジュールでは以下のように説明している。(説明文のみ抜粋)

「1 「V たいです」(普通形「V たい」)は、話し手がある行為をすることについての希望を表わします。2 「V たいです」は、「行きます→行き」のように「V ます」から「ます」をとった形、つまり V の連用形(→「普通形の体系」)に「たいです」をつけて作ります。3 「V たいです」の否定形の作り方は、イ形容詞と同じです。4 疑問文では希望の持ち主(N)は聞き手になります。5 「N は」は、省略することができます。6 直接的、生理的欲求などの場合、対象を示す「を」は「が」に代わることがあります。7 「V たいんですが」を使って、婉曲的に要望を表わしたり、許可を求めたりすることができます。8 あまり親しくない相手や敬意を表わすべき相手に対して要望を聞くと、「～たいですか」は使えません。9 願望の対象がものときは、「N がほしいです」を使います。(「N がほしいです/N がほしくありません」を見てください) 10 「V たいです」は 2 人称や 3 人称の人の願望を表現することはできません。また、「V たいです」は直接的な欲求表現で、相手や状況によっては使えないので、注意が必要です。」例文等を含めた説明は次の URL で見られる。<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ja/gmod/contents/explanation/067.html>

⁵ 以下のサイトや書籍を紹介した。①国際交流基金のサイト (<http://minnanokyoza.jp/kyozai/home/>)

- ④相互評価表（表 3）をよく読んで、評価基準を把握して、準備をする。
- ⑤実際に授業をしてそれを撮影するショートムービー形式にするのか、Microsoft PowerPoint（以下、PPT）のスライドを使ってビデオ化する（スライドショー形式）のかは、班で決める。
- ⑥ビデオの編集について、PC の場合は PPT での編集を説明するサイト⁶を紹介し、スマホの場合は無料アプリがいろいろあり既に履修生が使っていると思われるので、特に紹介はしない。

表 3：相互評価表

	とてもよい(3点)	よい(2点)	まあまあ(1点)
形の提示	学習文型の形がしっかりわかる。(そのための工夫がされている。)	学習文型の形を提示しているが、わかりにくいところがある。	学習文型の形を提示していないか、していても非常にわかりにくい。
意味と機能の提示	学習文型を使うと何が伝えられるのかがいかがわかる。(そのための工夫がされている。)	学習文型を使うと何が伝えられるのかは分かるが、曖昧なところもある。	学習文型を使うと何が伝えられるのかは分からない。
使い方	いつ、どのような場面で、誰が何のために使うかがしっかりわかる。(そのための工夫がされている。)	いつ、どのような場面で、誰が何のために使うかが、そのうちの1つが不明瞭である。	いつ、どのような場面で、誰が何のために使うかが2つ以上不明瞭である。
気づき	学習文型の意味や機能を学習者に気付かせる工夫を効果的にしている。	学習文型の意味や機能を学習者に気付かせる工夫をしているが、あまり効果的ではない。	学習文型の意味や機能を最初から直接教えてしまう。
準備	明確な目的を持ってきっちり作られている。	それなりに時間をかけて作られている。	適当な感じ。雑な作り。

2.3. 導入ビデオのアップロード

導入ビデオを作成しても、他の班が見られるようにしないと、発表にならない。本学静岡草薙キャンパスでは Microsoft office365 が全教員・全学生が使用できるようになっていたのも、その中にあるコミュニケーションプラットフォームの Teams を使用することにした。Teams については、ほとんどの学生が使った経験がなかったので、Teams 紹介ビデオ⁷を見せ、その後、導入ビデオの提出方法について説明した文書を配布した（図 1）。

ja/render.do)、②東京外国語大学言語モジュール (<http://www.coelang.tufts.ac.jp/mt/>)、③初級教科書「げんき」のサイト (<http://genki.japantimes.co.jp/resources/>)、④初級の教え方の本：「日本語の教え方 ABC」「みんなの日本語初級 1 教え方の手引き」、⑤初級の教科書（メインダイアログ）：「げんき」「まごころ」「できる日本語」「新文化初級日本語」など

⁶ ① PowerPoint で始める動画編集：<https://www.cresco.co.jp/blog/entry/1278/>、② PowerPoint のプレゼンテーションを動画に変換する方法：<https://dekiru.net/article/16878/>

⁷ Teams 紹介ビデオ：https://support.office.com/article/video-welcome-to-microsoft-teams-b98d533f-118e-4bae-bf44-3df2470c2b12?wt.mc_id=otc_microsoft_teams

導入動画のアップロードの仕方

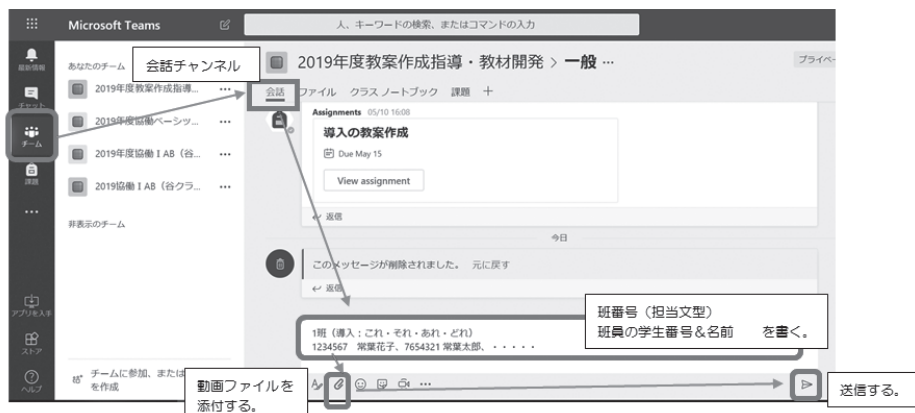


図 1：導入動画のアップロードの仕方

2.4. 「導入」ビデオの視聴と相互評価

第 7 回で 導入ビデオの視聴と相互評価を行った。ここでは自分たちとは違う課題をした班のビデオを対象とし（図 2）、班単位で相互評価表（表 3）に沿って班員内で十分議論して評価し、自由コメントを付けて Web フォームに入力した。（図 3）

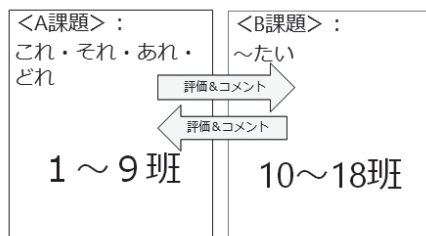


図 2：相互評価の方法

図 3：相互評価の web フォーム

2.5. 導入ビデオの相互評価結果とコメントの返却、班ごとのディスカッション

第 7 回の相互評価の結果とコメントを担当教員がまとめ、更に担当教員からのコメントを添えて返却シート（図 4）を作成し、第 8 回の授業時に班ごとに返却した。その後、各班内での話し合いは次の通りに進めるように指示した。

- ①相互評価で評価が高かった項目や低かった項目について話し合う。

- ②コメントを参考にして、自分たちの導入のよい点・改善点について話し合う。
- ③話し合いの際に、必要であれば、自分たちや他の班のビデオをもう一度見て意見交換する。
- ④話し合いのときにはその結果をまとめたレポート（図5）を提出するので、書記を決めて、出てきた意見をメモしておく。
- 次に、班での話し合いが終了したら、同様に話し合いが終えた班と一緒に班同士のディスカッションをした。その際に次のように進めるように指示した。
- ①導入ビデオ作成班の代表者が工夫したところや意図していたことなどについて説明する。
- ②ビデオ視聴班から印象に残ったところ、疑問に思ったところ、いいなと思ったところなどを伝える。
- ③相互で建設的なやり取りがあると望ましい。
- ④導入ビデオ作成班とビデオ視聴班を入れ替えて①～③を行う。

図4 評価班の相互評価結果

班	【動画の提示】	【資料と機材の提示】	【使い方】	【気づき】	【準備】
1	23	21	18	17	25
2	20	22	20	19	23
3	25	24	26	23	25
4	20	20	17	16	21
5	17	20	17	18	15
6	24	24	23	22	27
7	21	21	19	15	20
8	18	18	17	16	16
9	21	22	19	17	24

1 班への自由コメント
もう少し声の大きさを上げた方が良いと思いました。
場面設定を増やして通う場面を紹介するといいと思います。
最初の動物の導入の仕方がよく分からなかった。良い点も、動画でなくてから話せれば良かった。
準備から導入して良かった。
話す速さが変わった。単語の提示は良かったが、音がよく聞こえた。意味を動物から伝えてしまっている。お題の言い文、単語があったと思う。
位置関係がわかりやすかったです。動物が途中で終わってしまったので、わかりやすい締めが欲しいかなと思います。
動物の図解がわかりやすい。
知育の部分で動物の名前がわからなかった。これより「あれは」を付けるが良い。
写真を見せながら話しているのがわかりやすい。
相手と自分の範囲が明確に分かるので良い。

谷から
・後の練習で使うのかもしれませんが、最初の単語が多いかなと思いました。もちろん、最初に必要な単語を確認することは Good。
・二人で説明していますが、二人いっしょで実際に「こそあど」が使われる場面を見せる方がわかりやすいかなと思いました。日本語で説明されてもわからないので。

図4：相互評価結果等の返却シート

図5 2019 年教案作成指導・教材開発第 8 回レポート

班番号： 証典（名前・学籍番号） 例：常葉太郎（1234567）、・・・
話し合いやディスカッションで出たこと
各証典の役割分担と感想（自分で自分がしたことと感想を書く。文章の最後には自分の名前と学籍番号を書く。）例：「f・XXXXXXXXXXXXXXXXX」をした。今回やってみて、XXXXXXXXXXXXXXXXX（常葉太郎・1234567）」

図5：レポートテンプレート

3. 導入ビデオの分析

3.1. 「導入」ビデオの学生相互評価の結果

前述した通り、相互評価をする班のビデオは、自分とは異なる課題をした班のビデオである。A 課題において学生間の相互評価結果が最も高かった上位 2 班は、3 班と 6 班で、下位 2 班は 5 班と 8 班であった。5 班と 8 班は「使い方」と「気づき」の点数が低い。（表 4）

表 4：A 課題相互評価結果

班	時間	[形の提示]	[意味と機能の提示]	[使い方]	[気づき]	[準備]	合計	順位
1	2:45	23	21	18	17	25	104	3
2	2:26	20	22	20	19	23	104	3
3	5:03	25	24	26	23	25	123	1
4	1:57	20	20	17	16	21	94	7
5	0:47	17	20	17	18	15	87	8
6	1:12	24	24	23	22	27	120	2
7	1:46	21	21	19	15	20	96	6
8	1:00	18	18	17	16	16	85	9
9	2:11	21	22	19	17	24	103	5
平均		21.0	21.3	19.6	18.1	21.8	101.8	

注：太字が上位 2 班、網掛けが下位 2 班

A 課題の上位 2 班（3 班と 6 班）の導入ビデオを説明する。

3 班

- ① PPT のスライドをビデオ化したスライドショー式であった。
- ② 既出単語をスライドに絵を映しながら確認をした後に未習の単語をスライドで見せ、英語で “What is this?” と書いたスライドを見せて、学習文法を導入した。学習文法が使われる場面を作っている点は高く評価できる。
- ③ スライドにある絵を使っの文法説明があったが、スライド上の絵であるため、距離感を出すことが難しいと思われた。

6 班

- ① 実際の授業ビデオであった。
- ② 流れは単語の確認→モデル会話の提示（2 名で）→学習文法の説明（教師による口頭の説明とホワイトボードにあらかじめ書かれた例文）で構成されていた。モデル会話が、実際に人が登場してのやり取り映像になっており、「これ・それ・あれ・どれ」では距離感が大切になるので、その点で実際のやり取りを提示するのは伝わりやすいと思われた。

次に、A 課題の下位 2 班（5 班と 8 班）の導入ビデオについて述べる。

5 班

- ① スライドショーと実際のビデオの併用であった。
- ② 構成を見ると、学習文法の例文の提示（スライドだけで無音）→単語の確認（スライドだけで無音）→モデル会話ビデオ（2 名。音声あり。ただし、聞こえにくい）→説明スライド（例文と一緒に文字による説明。音声による説明なし）である。いきなり音声のないスライドから入ってしまうので、とまどってしまった。また、モデル会話で字幕を付けて 1 回だけしか提示しなかった点が惜しかった。

8 班

- ①実際のビデオとスライドショーの併用であった。モデル会話ビデオ（字幕あり）→学習文法の説明スライド（音なし）という流れだった。
- ②学生からのコメントでも指摘されていたが、ビデオのスピードがとても速く、また時間も 47 秒しかないため、内容がしっかり伝わらなかったと思われる。

B 課題において学生間の相互評価結果が最も高かった上位 2 班は 10 班と 11 班であり、下位 2 班は 15 班と 16 班であった。15 班と 16 班ともに「気づき」の点数が低い点は共通しているが、15 班は「準備」が、16 班は「使い方」が低い。

B 課題の上位 2 班（10 班と 11 班）の導入ビデオについて述べる。

10 班

- ①実際の授業を録画したショートムービー形式であった。
- ②ホワイトボードに絵が描いてあり、教師が音声だけで絵について質問し学習者が音声で答えている。このやり取りを通して学習文法を引き出している。その後、ホワイトボードに文法の説明と例文（英語と日本語との対比をしながら）を出し、PPT のスライドを使って学習文法の活用を音声とともに説明をしている。
- ③最後に別の動詞を使って活用の練習をしている。学習文型の説明が段階を追ってなされているため、分かりやすく、その点は相互評価の自由コメントでも触れられていた。学習文型の導入では言葉に頼りすぎている点を指摘できるが、言語に頼っての学習文型の導入はどの班にも見られた。

11 班

- ①実際の授業ビデオを録画したショートムービー形式であった。
- ②教師が学習文法を英語と対比しながら説明し、モデル会話（2 名）の提示をした。
- ③教師がモデル会話に出てきた例文を使って学習文型を説明し、別の例文を使って追加説明を行った。11 班のモデル会話は大学生同士の会話で学習者が興味を持って見るような工夫がされていたが、会話だけで進行するので状況が分かりづらく、言葉のみを頼りにしないといけなかったことや話すスピードが速くて繰り返しがあまりないことが改善点と言える。文型の説明部分はジェスチャーやレアリアを使用して段階を追って説明しているため、分かりやすい。

次に、A 課題の下位 2 班（15 班と 16 班）の導入ビデオを説明する。

15 班

- ① PPT のスライドをビデオ化したスライドショー式であった。
- ②教師がモデル会話を提示（スライドに人物 2 名。それぞれの人物の上にセリフが英訳と共に提示され、教師がセリフを音読）し、英語との対比から学習文法を音声で説明をした。その後、別スライドで活用を説明し、活用の練習（教師の後に学習者が発話）、学習文型を使って文を作らせる練習をさせた。

16 班

- ①実際の授業ビデオを録画したショートムービー形式であった。

②流れは、教師が学習者に質問し、学習者が答える。→教師が学習文型を提示する→ホワイトボードに動詞の分類表を提示する→教師が状況を説明して学習文法を使った例文を提示する→ホワイトボードにある動詞の分類表で、教師が辞書形から学習文法を使った活用に変形する例を示した後に、変形した活用を学習者が繰り返し返していた。

表 5：B 課題相互評価結果

班	時間	[形の提示]	[意味と機能の提示]	[使い方]	[気づき]	[準備]	合計	順位
10	3:37	23	23	23	21	24	114	2
11	3:30	23	24	25	20	25	117	1
12	3:20	22	20	22	17	23	104	4
13	3:45	24	21	21	18	26	110	3
14	3:16	20	20	21	18	23	102	5
15	3:00	20	24	22	15	19	100	8
16	4:27	20	20	18	14	24	96	9
17	1:56	22	20	21	17	21	101	6
18	2:04	22	21	21	15	22	101	6
平均		21.8	21.4	21.6	17.2	23.0	105.0	

注：太字が上位 2 班、網掛けが下位 2 班

3.2. 「導入」ビデオの別の教員による評価の結果

授業改善のために学生の相互評価が高かった導入ビデオと低かった導入ビデオ各 2 本に対して、別の教員が独自に全体評価（10 点満点）をした。

3.2.1. A 課題（こ・そ・あ・ど）

①上位 2 班（3 班と 6 班）

3 班

<全体評価> 3 点／10 点中

<いいところ>

- ・いきなり導入せずに、学習者がわからないだろう単語「ナス」の絵を提示し、What's this? と思ったのでは? という流れがいい。
- ・視覚に訴えようという意図が伝わる。

<気になったところ>

- ・That が「あれ」で、It が「それ」は正しい??
- ・最初の二人の絵の距離が近すぎて、「こ」と「そ」の違いが表せず、誤解を生みかねない。
- ・「あなたはリンゴが何なのかわかりません。この時、『どれがりんごですか』とい

うことができます。」と説明したが、「どれ」は三つ以上ある中で何を指すかわからない場合に使うのであって、「何か」わからない場合に使うのではない。誤解を生む。

- ・同時に、二人から見て、明らかに「りんご」とわかるものについて、「どれがりんごですか」という発話は現実ではありえない。
- ・「あれがりんごです」の説明として、「あなた」と「友達」はりんごから離れたところにある、と説明があるが、画面上の絵では、二人の間（中間距離）にリンゴがあり、「あれ」が使えない。誤解を生む。
- ・全体として、「こ・そ・あ・ど」の意味・用法に誤解を与えかねない導入となっている。
- ・全体的に「こ・そ・あ」を習う段階にしては難しい言葉がたくさん使われている（例：距離、離れた、とき、ので）。

6班

＜全体評価＞ 5 点／ 10 点中

＜いいところ＞

- ・実際に人が二人登場しているので、視覚的にわかりやすい。
- ・導入時の「これ」「それ」はわかりやすい。たとえば、「あれ、とってください」を受け、相手が物の近くまでいき、「これですか」はわかりやすい。その後、「違います」と言われたら、すぐ横の物を持ち、「これですか」と言うのもわかりやすい。
- ・「まとめ」があるのはよく、説明自体はある程度わかりやすい。

＜気になったところ＞

- ・二人が登場し、机を挟んで、「あれは何ですか」と質問しているが、相手に物が割と近いので、「それ」と勘違いされる可能性がある。もっと二人からの距離が必要。
- ・「ペンは何ですか」→「ペンは何ですか」と言っていたが、本来は「どれがペンですか」→「これがペンです」では？
- ・物が二つしかないのに、「ペンは何ですか」はおかしい。「どちらですか」「どちらですか」が正しい。
- ・誰が見ても、「本」「ペン」「ふでばこ」とわかるものを、「何ですか」という発話は、実際の会話として不自然。
- ・せっかくまとめの説明自体はいいのに、板書の人の絵（A、B）の位置が説明と反対になってしまい、誤解を生みかねない。

②下位 2 班（5 班と 8 班）

5班

＜全体評価＞ 6 点／ 10 点中

<いいところ>

- ・実際に二人の人が登場しているので、視覚的にわかりやすい。
- ・「これ」「それ」「あれ」の距離感が適切で、わかりやすい。
- ・「どれですか」に対して、時計に近づき、「これです」はわかりやすい。
- ・「まとめ」があるのはよく、「こ・そ・あ・ど」の違いをある程度うまく表している。

<気になったところ>

- ・一つしかないのに、「どれですか」はおかしい。理解できないだろう。
- ・「まとめ」では、違いを整理する意図があるのだが、二人の人の絵の片方に吹き出しをつけるなどしないと、どちらが話すのかわからず、「こ・そ・あ・ど」の特徴が示しきれない。
- ・「まとめ」が音声だけなのが残念。実際に教師が絵を指しながら説明するなどしたほうがよさそう。
- ・「本」「ペン」「時計」など、明らかに相手もわかっているものを、「これは本です」などと言うのは、実際の会話ではありえない。

8班

<全体評価> 7点 / 10点中

<いいところ>

- ・「あれ」「これ」「それ」の導入がわかりやすい。「どれですか」と聞かれて、実際に物の近くまで行き、「これです」というのはいい。
- ・箱に入っていて、見えないものについて、「何ですか」と聞いていて、実際にあり得る会話である。
- ・まとめがあるのはよく、「こ・そ・あ・ど」の4つの絵が非常にわかりやすい。しかも、その絵が最後に静止画になっているので、じっくり見られる。

<気になったところ>

- ・冒頭の導入で、「それです」を教える場面としては二人の距離がやや近づきすぎており、誤解を生みかねない。
- ・全体の時間が短く、一回しか説明がないのが残念。十分性の面でややマイナス。
- ・冒頭の導入の箱は二つなら、「どちらですか」「どっちですか」になってしまい、誤解を生みかねない。3つ箱が必要。
- ・途中で挟み込まれる「同じものを意味するときでも「こ・そ・あ・ど」と言い方が変わります」の静止画像と絵は少々わかりにくい。
- ・「まとめ」が無言であり、図示のみなので、理解を十分に図るまではいかない。音声を入れるか、図を使って、実際の人が説明をしたほうがよい。

3.2.2. B課題（～たいです）

①上位2班（10班と11班）

10班

<全体評価> 7 点／ 10 点中

<いいところ>

- ・最初に「目標：～たいです」と書いてあるのは、何を学ぶのかが明示されていてよい。
- ・板書された 2 枚のイラスト（飲みたい・寝たい）がとても文型をうまく表しており、わかりやすい。
- ・イラストに基づいて、それぞれ教師役と学生役が音声で登場し、文脈を示しているのは、よい。
- ・「～たいです」を含んだ例文の英訳をつけているのは、英語母語話者にとってはいい。
- ・「寝たいです」の接続導入の際、教師と学生の会話において、学生役がわざと「ねますたいです」と間違え、その後、「ねたいです」と導いたこと、その後の文字による接続の仕方提示は、流れと方法ともにわかりやすい。
- ・接続の確認が終わった後に、「～たいです」→「名詞＋助詞＋たいです」と長くしてリピートする練習があったのは、易→難になっており、流れとしてよい。

<気になったところ>

- ・学習項目「～たいです」を目標と掲げることで、「文型ありき」という感が否めない。やりたいことがあって、その時に初めて「～たいです」が使われることが示せるとなおよい。
- ・せっかくイラストがうまく「～たいです」を表しているのに、その文型を導く、教師と学生の会話の冒頭で異なる文型をわざわざ提示してしまっており、余計な情報を与え、少々学生を混乱させかねない。うまく「～たいです」に繋がるキューを出したい。

例) (「コーヒーが飲みたい」の絵を使って)

T: このイラストは何だと思えますか。→ S: これは「コーヒーを飲みます？」
(「寝たい」のイラストを使って)

T: この人は何をしていますか。→ S: この人は寝ています。

- ・全体的に、説明の際に未学習の語彙・文型が多く、さらに、長い文で話しているため、学習者は理解が困難だろう。もっとシンプルに言わなければならない。
- 例) ・この場合動詞は drink になるので、「～したい」の前に「飲む」をくっつけて、「飲みたい」になります。
- ・「食べたい」「飲みたい」の前に名詞を入れれば、「～したい」という文が作れます。
- ・「～たいです」→「名詞＋助詞＋たいです」と長くしてリピートする練習の際、冒頭に「私は」をつけて繰り返させてもいたが、「私は」は省略されることが多いので、不要では？

11 班

<全体評価> 8 点／ 10 点中

<いいところ>

- ・実際に教師役の人が登場し、説明→導入文型が含まれるモデル会話例を、実際の人2名が提示→教師役の人がさらに説明、という流れにより、文型自体の理解と、使われる文脈の両方を示してよい。
- ・モデル会話例は、相づちやフィラー、コメントなどを盛り込み、自然さにこだわっている点が、教室外で学習者が耳にする日本語に近くよい。また、文型が使われる文脈を提示しているという点でも評価できる。
- ・あらかじめ、ポイント（例文、英語での翻訳、接続など）がきれいに丁寧に板書してあり、わかりやすい。
- ・教師役の日本語がはっきり大きく、聞き取りやすい。
- ・教師役がモデル会話の後の説明で、「～たいです」が使われる文脈をさらに2例提示している点からもわかるように、本導入は、使用文脈をできるだけ示そうとしている点が評価できる。
- ・Advanced といって、「～たいです」の前の動詞が異なるケースも紹介しているのはいい。

<気になったところ>

- ・モデル会話例の二人の会話が早口で、かつはっきりしないところがあり、導入としては聞き取りにくい。2回、3回聞かせるなどの工夫がほしい。
- ・モデル会話内で「何がしたいですか」に対して、「ラーメンを食べに行きたいです」と「動詞のます語幹＋に＋行きたい」という未学習であろう文型で答えており、学習者に導入文型以外の疑問を抱かせてしまいかねない。
- ・教師役の説明する日本語に未学習の語彙が多く含まれるとともに、長いため、学習者は理解しにくいだろう。
例) このように、「～たいです」という文に動詞を当てはめる時は動詞の形が変化します。
- ・「たいです」への動詞の接続について、「ます形」といえばいいのだが、一回も言うことなく、「動詞が変化します」と説明しているのが残念。
- ・Advanced といって、「～たいです」の前の動詞が異なるケースも紹介しているのはいいが、「なる」の前は、「を」ではなくて、「に」だと説明があるとさらによかった。

②下位2班（15班と16班）

15班

<全体評価> 3点／10点中

<いいところ>

- ・冒頭の導入部分で英語訳と日本語訳併記にて「～たいです」の例文を挙げているので、たぶん文法の意味理解はできる。
- ・「～たいです」の動詞の接続を説明するパートを文字と音声で示しているが、その図示はわかりやすい。

例) 活用形

ラーメン○食べます →食べたいです

× ○

- ・接続確認の後、「動詞の確認」として「作ります」→「作りたいです」のようなリピート練習が6回続くが、教師役一人がモデルをし、学生役二人が繰り返すミムメム練習での音声提示をしているので、この動画を見た学習者も何をやるかがわかりやすいと思われる。
- ・画面上の次のパートに移る際、右上に指が登場し、クリックをするのが切り替えとしてわかりやすい。
- ・最後に、三人称の場合は「～たいです」が使えないことに触れている。

<気になったところ>

- ・図や文字はあるとはいえ、全体的に未学習の語彙文型をたくさん使い、非常に長い日本語で説明をしているので、学習者はその音声の理解に負担を感じるし、理解に苦勞すると思われる。

例) (接続の説明の際) 動詞を「～たい」の形で使うには形が変わります。次のように考えてみましょう。例えば、食べるを「○○したいです」の形にすると「食べたいです」になります。……

- ・「動詞の確認」のパートでリピート練習をさせる際絵が提示されるが、「～たいです」ではなく、単なるその動詞の動きを表す絵になってしまっている。
- ・最後に三人称の場合は「～たいです」は使えないことに触れているが、音声のみで難しい語彙文型が含まれた長い文で言っているので、理解が困難だと思われる。

16 班

<全体評価> 4 点 / 10 点中

<いいところ>

- ・教師役が登場し、適宜文字カードや板書の表を使ったりするため、何を説明しているか何をさせたいかが学習者に伝わりやすい。
- ・導入の際教師役と学習者役の会話にて文型を提示しようとしているが、その際に「えっと」や「いいですね」など言いよどみやコメントを盛り込んでおり、自然さの面でいい。
- ・導入の際、文字カードを2, 3使っていたのがわかりやすさの面でいい。
- ・「今日習う文型の確認」とテロップが出たパートでは、2つ教師と学生役が会話を提示しており、どんな場面で「～たいです」を使用するのか文脈が明示され、わかりやすい。
- ・板書された、動詞のグループごとの活用表がわかりやすい。
- ・全体の構成はよい。

<気になったところ>

- ・文型導入の際、教師が「私は映画を見ます。私は映画が見たいです」と言い、「～

たいです」を提示していたが、「～ます」と「～たいです」は異なる用法なので、混乱させかねない。

- ・表を使った活用練習が単調なりピート練習になってしまっており、退屈。
- ・表が動詞のグループごとに書かれているが、「～たいです」の活用練習時にはグループ分けは不要。
- ・接続を示す際、「ます形」という活用形に一切触れないのはなぜか。
- ・画面に現れるテロップの内容が学習者には役に立たない。教える教師向けになってしまっている。

A課題については、学生間相互評価の結果と別の教員の結果が大きく異なっている。特に「これ・それ・あれ・どれ」の場合、距離の違いが文型の意味と機能の理解において重要なポイントになるが、導入ビデオを作成する学生もまたそれを見て相互評価する学生も導入文型についての理解不足のため、見過ごされた可能性がある。「～たいです」を取り上げたB課題については、学生と日本語教育の専門家の間には大きな違いがなかった。これは「これ・それ・あれ・どれ」に比べ「～たいです」は意味と機能が直感的に理解しやすく、使用場面も思い浮かびやすいためとも考えられる。

4. 最後に

當作（2019）では教育でテクノロジーを活用する場合に、そのテクノロジーが教育にどのような影響を与えるのかを示すモデル「SAMR モデル」(Puentedura 2014)を紹介している。このモデルを援用して今回の試みを整理すると、表6のようになる。

表6：SAMR モデルによる今回の試みの整理

構成要素	構成要素の説明	今回の試み
R (Redefinition：定義)	テクノロジーの使用によりこれまで考えられなかったこと、できなかった機能・タスクが可能になる。	<ul style="list-style-type: none"> ・発表を何度も見る。 ・他の発表と比較するために発表をもう一度見る。 ・最もよくできた発表を見せることができる。 ・ビデオ撮影・編集のスキルを身に着ける。
M (Modificatuion：変更)	テクノロジーの使用によって機能・タスクが大幅に変更される。	<ul style="list-style-type: none"> ・相互評価をその場とするのではなく、ビデオを見て評価することになったので、より時間をかけられるようになる。
A (Augmentation：増強)	テクノロジーがこれまでの機能・タスクを代替するのに加え、機能・タスクを改善、向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオなので、何度も見られる。 ・他のビデオと比較しやすい。 ・ビデオなので、何度も作りなおせる。

S (Substitution : 代替)	テクノロジーを使わずにする機能・タスクをそのままテクノロジーが引き継ぐ。	・教室内での発表を PPT のビデオ上で行う。
-----------------------	--------------------------------------	-------------------------

授業担当者の観察ではあるが、発表をビデオにすることにより、相互評価時の履修者同士のコメントが多くなっていた。クラスで発表していたときは次から次に発表がされるので、評価がおざなりになっていたが、今回ビデオになったので、ゆっくり見ることができるようになったのと同時に、班単位で評価することで班内での話し合いが増え、その結果、コメントが増えた。また、コメントも例年以上にかなりの確なものが多くなった。

また、発表用のビデオを作成することでビデオ撮影や編集の経験を積むことができた。日本語教育においても今後 ICT の活用が更に進むと予想されるので、専門的なスキル習得までは難しくても、経験を積んでおくことは有効であると思う。

授業担当者だけでは気が付かなかった点について、別の教員からフィードバックを受けたので、相互評価表を中心に改善に努めていきたい。

参考文献

- 當作靖彦 (2019)「ネットワーク時代の言語教育・言語学習」當作靖彦 (監修)・李在鎬 (編)『ICT × 日本語教育』ひつじ書房
- Puentedura, R. (2014) Learning, Technology, and the SAMR Model: Goals, Processes, and Practice
(<http://www.hippasus.com/rrpweblog/archives/2014/06/29/LearningTechnologySAMRModel.pdf> 2019 年 11 月 8 日閲覧)

